

就労移行支援事業所における当事者研究の実践 —ワクワク当事者研究プレゼン大会—

○池田 貴弥（一般社団法人キャリカ）
田中 庸介（一般社団法人キャリカ）
松岡 広樹（一般社団法人キャリカ）

一般社団法人キャリカ

就労移行支援
自立訓練
就労定着支援
就労選択支援



キャリア・リカバリーサポートセンターを略したもので
す。リカバリーという自分らしい生き方をみつけ、かけがえのない大切な人生を楽しく生きることも含めた支援をすることを目指しています。

友達がいたり、趣味があつたり、何か活躍できたりすることがあれば、少し大変な仕事があったとしても頑張ることが出来ます。そんな当たり前の暮らしをキャリカは応援します。

発表の流れ

1. 問題と目的

2. 方法

3. 結果

4. 考察

1. 問題と目的

・精神障害者の離職率の高さ

主な離職理由として「労働条件が合わない」「遂行上の課題あり」

「病気・障害のため」が上位となっている (障害者職業総合センター, 2017)

⇒離職要因として障害受容とリカバリーの重要性

・当事者研究

ミッション：障害受容とリカバリーを高める

障害受容：①自らの経験を他者と共有②特性やパターンの理解

リカバリー：①他者との繋がり②将来の希望と楽観③気づき・自分らしさ
④生活の意義⑤エンパワメント

「研究」の視点から仲間とともに見つめ直し、「苦労の分かち合い」を
大切にしながらユニークな自己表現をする機会の創出

<当事業所の当事者研究の特色>

仲間とともに「苦労の文化」を
分かち合うチーム構成

ユーモアと創造性を重視した
自己表現型の研究発表

語りを中心とした
プロセス重視の支援設計

支援者との協同による関係性の構築

2. 方法

対象：当法人サービス（就労移行支援・自立訓練）利用者

期間：2025年6月～11月

取り組み内容：2025年6月～11月

- ・ Recovery Assessment Scale(RAS)の実施
- ・ プログラムの実施：6~9月（月4回） 9~10月（月12回）
- ・ 当事者研究ワークシート実践
- ・ 当事者研究プレゼン発表会（地域コミュニティーセンター）
- ・ 当事者研究参加者ヘインタビュー形式で振り返りを実施

2. 方法

効果測定：

1) リカバリーの主観的側面、障害受容の程度を測定

RAS(Recovery Assessment Scale)日本語版を使用。

目標/成功志向・希望9項目、他者への信頼4項目、

自信をもつこと5項目、症状に支配されないこと2項目、

手助けを求めるのをいとわないこと4項目の計24項目、7件法

(Chiba, Miyamoto, Kawakami, 2010)

2) 当事者研究を経験しての参加者の変化

参加前の困りごと・悩み、研究過程での体験、研究後の変化・効果を

半構造化インタビューを実施

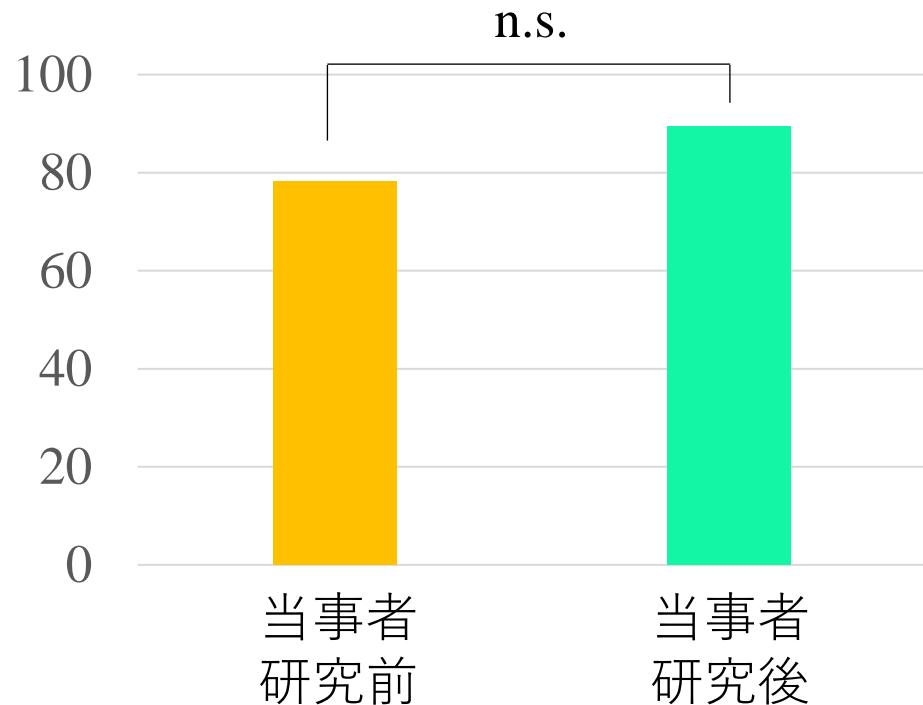
3) 当事者研究発表会参加者満足度について

当事者研究発表会参加者に対して満足度を5件法で測定

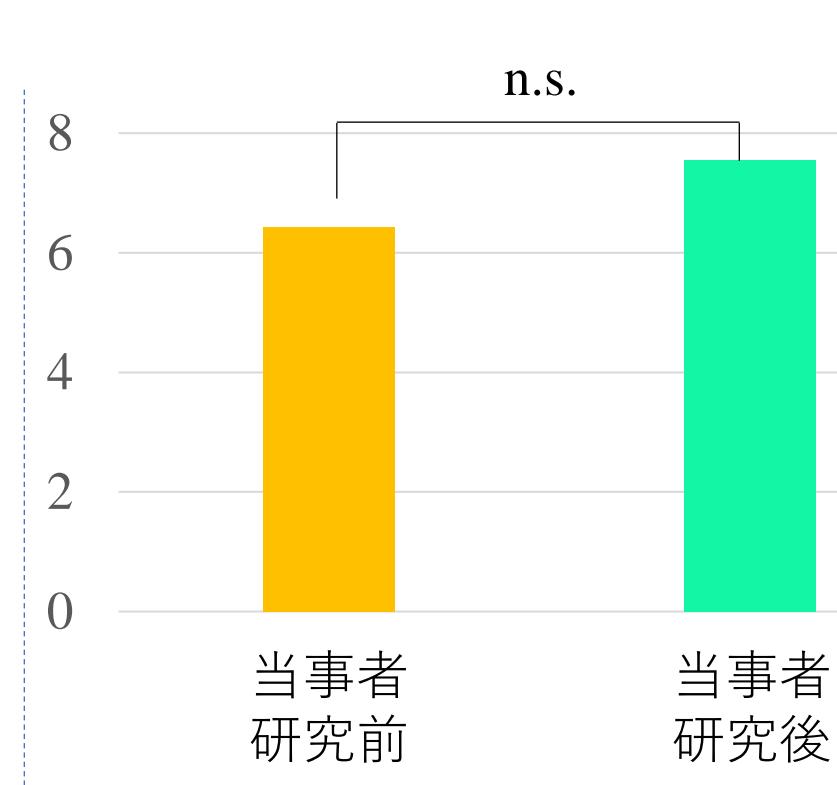
3. 結果

■ RAS(Recovery Assessment Scale)について

<合計スコア>



<障害受容スコア>



3. 結果

■半構造化インタビュー結果：障害受容に関する内容の抜粋

1. 自らの経験を他者と共有

- ・周囲と悩みを語りあう中で同じ悩みを持っている人がたくさんいて自分だけの悩みじゃないんだ外見では分からない本人の内面の状態が分かって、一人じゃないという安心があった。
- ・同じ障害を持ち同じ症状を持つ人と関わる中で対処法も同じだったり、自分の思っている事注意している事が同じだと認識できて安心感や納得感があった。
- ・対話をしていく内に自分の出来事が受け入れてもらう事と共感を生む事ができた。自分の中では良くない体験だったが周囲に共感をしてもらい貴重な体験だと感じることが出来た。
- ・色々違うけど、なんかちょっと似ている障害を持っていたり困りごとを持っている人がいて落ち着いた。
- ・孤独感が減った感じがした、自分には仲間がいると思った時々、寂しさはあったけれどなんか軽くなった感じがする。
周囲の人に支えられている感じがした。

3. 結果

■半構造化インタビュー結果：障害受容に関する内容の抜粋

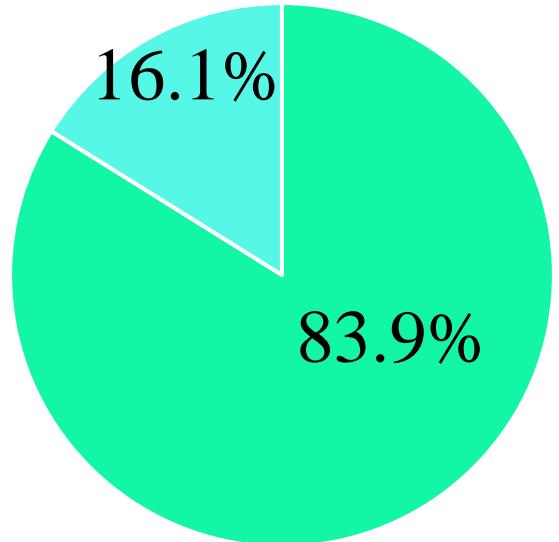
2. 特性やパターンの理解

- ・自分に合っている対処方法が明確になった気がする。
- ・少しだけ変化が現れた。少しだけ自分で困りごとが何か自分は今どんな状態か分かるようになって少し人と話せるようになった。
- ・難しいけれど、自分とは何か、を考えるきっかけになった。自分自身で知っている様で知らない自分がいる事を気づけるきっかけになった。
- ・特に変わらなかった（自分の特性や困りごとパターンはもうしょうがない。自分ではなんともできなからしようがないなと思う）
- ・特になかったかな。薬を飲むこととゆっくり休むこと。
- ・多分あったんじゃないかな自分が困る事もあるけどその都度考えればいいかなって思って。起きたときに考えて負のサイクルをとめるその場で気分転換をしたり起きたときに対処をすればいいかと思えた。

3. 結果

■当事者研究発表会参加者満足度について

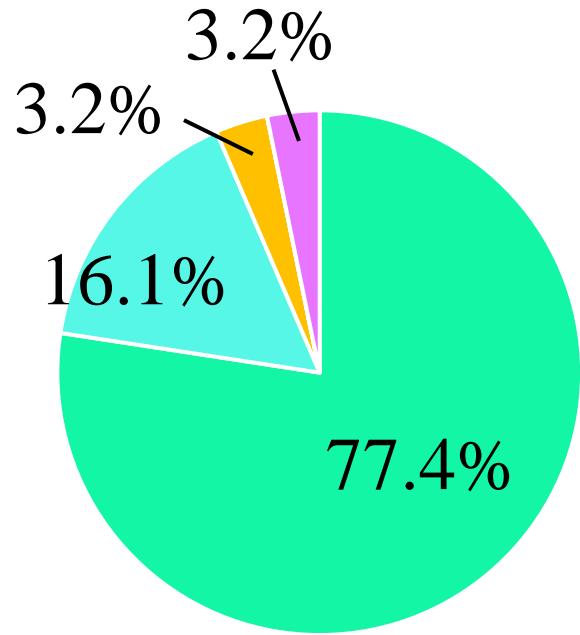
<発表会全体の満足度>



■満足度

- 満足
- やや満足
- どちらでもない
- やや不満足
- 不満足

<また参加したいと思うか>



■意欲

- 参加したい
- どちらかというと参加したい
- どちらでもない
- 未回答

■当事者研究発表会参加者の声

- ・ 3ヵ月もかけて自分に向き合って弱い所を考える、という過程で仲間と分かち合える所が素晴らしいです。
自分自身ももっと自分と向き合いたいと思いました。
- ・ どのチームも一生懸命に発表されていて、自分の障害や困りごとと向き合いなんとかしようという気持ちが伝わりました。
障害のあるなしに関わらず「誰にでもあること」だとも思いました。
- ・ 皆さんがご自分の特徴をとても楽しく前向きにお話されている姿がとても素敵で涙が出そうになりました。
私も自分の弱みを受け入れて前に進みたいです。
- ・ それぞれのチームの発表だけでなく、全体の雰囲気や皆さんの関係性すべてがとてもあたたかく感じました。
大勢の方の前での発表も堂々とされていてかっこよかったです。

4. 考察・当事者研究の可能性

- ・量的な変化こそ見られなかつたが、インタビュー結果から参加者の肯定的な変化が伺われており、参加者にとって意味ある経験となつた可能性が示唆された
- ・発表会参加者の満足度の高さや感想から、当事者研究を公開することでコミュニティに対してポジティブな影響を与えられた可能性がある



これからの取り組み

- 1) 当事者研究に参加するにあたつての“支援者教育”的必要性
- 2) “心理的安全性の向上”を図る事によってより活発な経験の共有を促す
- 3) 地域や他事業所との合同発表など、当事者研究の“公開性”を高める
取り組みを継続的に行う

参考：熊谷 (2022)